

シャルル・ペロー『古代人近代人比較論』におけるビュルレスク

Burlesque styles in « Parallèle des anciens et des modernes » by Charles Perrault

中島 潤†
NAKAJIMA, Jun

Abstract: This paper deals with the burlesque style argued by Charles Perrault (1628-1703) who defended French modernity in 17th century. This literary style was very popular in French Kingdom from the forties to the fifties of the seventeenth century. For Perrault, who was the top leader of Quarrel of the Ancients and the Moderns (1687-1694), this style was one of the strongest arguments for the triumph of the French modernism over the classicism. In this paper we supposed the reason why Perrault championed so powerfully this new style which the Greeks or the Romans hadn't known.

1. はじめに

(ビュルレスクは)最初の二つよりも遙かに悪い麻葉ですね。神父さま、卸売市場のように話し、下品さや汚物でしか楽しませず、全てが汚くぼろで覆われ、長らく厚かましくも社交界で作られてきたこの詩、バルナツスの恥をもってわれらの世紀の名誉とするなどということがありましょか¹。

近代派の領袖を自負するシャルル・ペロー Charles Perrault (1628-1703)が、1687年に始まる新旧論争において、ギリシャ・ローマという古代に対する近代、とりわけフランスの優越性の証明として、様々な論拠を「対話」という形式を使用し書き上げた『古代人近代人比較論』 *Parallèle des Anciens et des Modernes* (以下、『比較論』)は、1688年から1697年の十年間にわたり全四巻が出版された。全巻で千四百ページにも及ぶ膨大な著作であり、文芸だけに留まらず、彼自身がコルベールのもとで王用建築物監督官としてフランス国内の設計・施工を監督する立場となった建築という分野をはじめ、造形芸術一般から天文学や医学などの自然科学、地理学、航海術、兵法、哲学、音楽に至るまでさまざまなジャンルにおいてフランスの優越を論証するという壮大な構想を持つ著作である。本稿では、近代人優越の根拠の一つとなった「ビュルレスク」と彼の主張について考察を行う。

2. ビュルレスクとは

プレシオジテに先立ち、ペローが文芸に関与する糸口となった「近代的」な潮流がビュルレスク burlesque であった。兄クロード、ニコラとの共作ではあるが、ペローが詩

人としてはじめて出版した創作は当時大流行をしていたスカロンを真似た『トロイの壁』(1653)²というビュルレスクの作品であったことは良く知られている。いっぽう、冒頭に引用した古代派の代弁者「裁判所長官」によって非難されるように、ペローの論敵ボワローは『諷刺詩』において流行自体はすでに終息していたものの根強く残っていたビュルレスクの様式の使用を諷めることになる。

良識などには目もくれず厚顔無恥なビュルレスク
当初は人目を欺いてその新奇さで取り入った
さてそれからは詩の中に陳腐な駄洒落を見るばかり
詩神の住まうパルナスも市場言葉を話し出し
詩的破格も何のその止め処もないほどくずれ去り
戯作アポロンではもうタバラン風情に落ちぶれた
この悪質な流行病地方にまでも伝染し
書生や町人から更に王侯達まで蔓延った
どんなに下らぬ冗談も喝采する者現れて
ダスーシーに到るまで誰でも読者を見出した
しかし斯様な文辞から遂に宮廷目を覚まし
斯様な詩句の無造作な突飛さ蔑むようになり
平板ぶりや可笑しみと自然らしさを識別し
『颱風』称讃することは地方に任せることにした³

イタリア語の「ビュルラ」(burla=「冗談」の意)を語源とするビュルレスクという潮流は、スカロンによる大成を待つまでもなく、何人かの作家に見ることができた。ブラッチオリニ Bracciolini (1380-1459)やベルニ Berni(1497-1535)、タッソーニ Tassoni (1565-1635)などの先駆者をイタリアに持つとともに、前世紀の作家、マロヤラブレーなどにその兆しを見いだす向きも存在する。イタリア人のなかでも、モデナ生まれの詩人アレッサンドロ・タッソーニは、ペローの兄ピエールが、『盗まれた水筒』 *La scchia rapita*(1622)を仏訳 (*Le seau enlevé* (1678)) したこと

† 愛知工業大学非常勤講師 (長久手町)

でも知られており、ニコラ、クロード、ピエールにペローと兄弟の四人ともがこのジャンルにのめり込んだ。

「理性的なものでは二つの概念が一致をしているのですが、滑稽の一種であるビュルレスクは、真実の概念に対して不均衡の概念を与えます。ところで、この不均衡は二つの方法で為されます。ひとつは高いものを低めて語ることであり、もう一つは低いものを豪華に語ることであります。話題の二つのビュルレスクがなされるのもこの二つの不均衡によるのです」⁴とは、ペローが『比較論』においてビュルレスクに与えた定義である。主に八音綴が使われ、英雄的な人物・事象を下賤な言葉で書き換えるという様式がビュルレスクの共通項であるが、後述するように、スカロンが範を示した様式に加え、風俗描写や政治的檄文など、必ずしも文芸に関わらないものにも「ビュルレスク」の冠が与えられることになった。「低いものを豪華に語ること」とペローが定義するような「ビュルレスク」は必ずしも一般的なものではなかった。その典型はこのようなこのような風潮への反発として書かれたボワローの『書見台』*Le Lutrin*(1672, 1674, 1683)にあるが、「しかし、よくよく考えてみると、いくら美しくても、『書見台』のビュルレスクは、裏返ったビュルレスクでしかありません」⁵とこれを正当なビュルレスクとペローは認めていない。ペローの代弁者たる対話者「神父」は、「バヴォレをつけたお姫様は、冠を被った村娘よりも愛らしいのですから、ありふれて陽気な表現の下に隠された深刻でまじめなことは、豪華で輝かしい表現の下に詰まらない民衆的なものよりも楽しみがあります」⁶とボワローによる亜種に対して攻撃を加えることを忘れはしない。

メナージュ Gilles Ménage(1613-1692)やペリソン Paul Pellisson-Fontanier(1624-1693)によると、フランスにおいてはじめてビュルレスクという様式を意図的に用いたのは、『はつかねずみ』*Galanterie à une dame à qui on avait donné en raillant le nom de souris*(1644)などを残したサラザン Jean-François Sarrasin(vers 1614-1654)であるとされているが、この分野を最終的に確立した人物はスカロン Paul Scarron (1620-1660)であることには異論がないであろう。『台風』*Typhon ou la Gigantomachie*(1644)、『戯作ウエルギリウス』*Virgile travesti*(1648)、マザラン攻撃文書のパロディともいえる『マザリナード』*Mazarinade*(1651)等の作品によってこの様式を確立したと見られたスカロンであるが、これをいつでも放棄する準備があると宣言してしまう。この理由には、書店がビュルレスクという流行り言葉を冠して出版しようとするあまり、「ビュルレスク」という単語自体がスカロンの意図しない政治的な檄文や、『ビュルレスク詩によるわれらが主の受難』*Passion de Notre Seigneur en vers burlesques*(1649)などのように宗教的著作にも用いられるようになったことが挙げられる。第一人者自身このような自己批判を行ったことを理由にか、フ

ロンドの乱を境に流行自体は収束してしまうことになる。ペロー一家が『トロイの壁』を書くことになったのは、いったん流行が収束した以降になる。

ビュルレスクの大流行から約半世紀がたった九十年代においてペローは、ビュルレスクには二つの種類があり、それらは峻別されるべきであるという。

正直にいいまして、あなたが仰るビュルレスクはきわめて悪い詩歌であります、恥知らずではないビュルレスクも存在しており、たまに少し民衆的な言葉を使うと言っても、それは卸売市場の言葉を話しませんし、『偽作ウエルギリウス』の作者のもののように、優美さや美しさをもつビュルレスクがあるのです。この作品が出た当時には、質の悪いビュルレスクが出て、このジャンル全体に嫌悪感を与えてしまいました。しかし、彼を真似たほとんどのビュルレスクが、泥臭さと魚売りの女を感じさせる一方で、彼のものは雅な人を感じさせ、宮廷と社交界の雰囲気を持っていました⁷。

このように神父＝ペローは、ビュルレスクという様式には、スカロンの作品を代表とした良質のものと、スカロンがその安易な流行を諷める原因となった「質の悪いビュルレスク」が存在することを主張する。古代人において例えば、ペトロニウスの作品がビュルレスクの一つであるという裁判所長官の主張については、滑稽なだけで立場の逆転という決定的要素が欠けていることから、神父＝ペローはこれを退けている。

3. ペローのビュルレスク観

わたくしは、内容や作品の主題の扱い方において、古代人と異なるいくつかの詩歌について話しているのです。まず、三つのものが思い浮かびます。オペラ、雅な恋愛詩、そしてビュルレスクであります。この詩のジャンルは新しく、古代には知られていなかったことを認めざるを得ません⁸。

近代人優越の明白な根拠としてペローが挙げる「ルイ大王の治世」において、古代人には知られなかった近代的な文芸ジャンルとして登場した三つの様式が『比較論』には数えられている。『比較論』で展開される近代優越の根拠は、「第二巻」末に簡潔に纏められている(①「時間」の要素。②時間に伴う様々な知識の蓄積という効果。③古代人には知られていなかった新しい「方法」の発見。④印刷術による知の拡大。⑤作品を発表する機会の増加。⑥創作によって得られる名声と報酬の差異)⁹。これらは近代人の「雄弁」における優越を論じたものであるが、ペローの

主張は「時間」（「科学技術」）、「信仰」、「方法」の三つに集約できると思われる。「時間の要素」は、「科学技術」の進歩と密接な関係がある。時間とともに人間の持ちうる知識は増大する。ここには印刷術の発明や図書の普及といった物理的な側面も含まれている。「いまアフリカの砂漠に歩くライオンやトラはアレクサンドロスやアウグストゥスの時代と同じように誇り高く残忍であり、われわれのバラは黄金時代と同じく肉色ですが、この一般論から人間が除外されるのでしょうか。ですから古代人と近代人について比較すべきは、同一であらゆる時代の卓越した人間においては同格の純粋に自然な才能の優劣ではなく、ただ時代によって多くの差異や不均等のあるその作品の美についてや、芸術や科学について持っている知識についてなのです。科学や芸術は省察や法則や規則の蓄積でしかなく、その詩（『ルイ大王の世紀』）の作者も当然主張し、わたしも彼共々強く主張しますが、その蓄積は日々増大し、時代が進むにつれて大きくなるということです」¹⁰と神父＝ペローが述べるように、これは科学技術に適用されるのみならず文芸をはじめとした芸術にも当てはまることであった。この「時間の要素」によって、アリストパネスよりも、プラウトゥス、テレンティウスが、さらにモリエールが優越し（「第三巻」）、シャプランやデマレなどの近代人叙事詩が『イリアス』や『オデュッセイア』に優越した（「第三巻」）。絵画においてミケランジェロよりもル＝ブランが優越するという奇妙な論理が押し通されるのも遠近法などの「知識」の蓄積を理由としていた（「第一巻」）。このような楽天的な直線的進歩観は、科学技術の進歩という現実を裏付けとしていた。「第四巻」で主に扱われる天文学、航海術、戦争術、医学などといった分野はその明かな証拠として提示されていた。望遠鏡によるガリレイの天体観測やマルピーギによる顕微鏡観察、ハーヴェイの血液循環などは、『比較論』とともに『ルイ大王の世紀』にも引用されていた。「第四巻」において古代には多声音楽が存在しなかったことを理由として、近代音楽の優越性を神父＝ペローが論じるように、知識の増大を祝福することは、とりわけ詩歌において古代人が行うことのなかった様式、とりわけビュルレスク、オペラ、ギャラントリーの存在を理由に近代の進歩を見いだすことに繋がったと思われる。

ペローがビュルレスクという様式を擁護した理由としては、十七世紀半ばの流行期にこれを自ら実作していたこと、古代人に存在しなかったジャンルであったこととともに、『戯作ウェルギリウス』や『トロイの壁』がそうであったように、『アエネイス』など権威ある古代作品を下敷きにしながらもそれを意図的に貶めた文体で書き出すことが、古代に対する近代の優越を謳う近代派の性癖に合致していたものと思われる。

「民衆的な言葉」を使用して描かれるビュルレスクというジャンルは、ペローの民衆への反感とともに愛情も混じ

った興味を反映する。「青表紙本」という行商人が流通させた書籍をソースとし民間伝承を起源と持つコントというジャンルに取りかかるのは、彼らへの多大な興味があったからこそであった。なかでも、韻文コント『愚かな願い』はビュルレスク的な描写が見られる。上記のようにあからさまに民衆に対する嫌悪感を表明する場面も多々見られるが、『回想録』には庶民への同情を示している場面が多く存在する。チュイルリーへのパリ市民の立ち入りを禁止する計画に反対したり¹¹、パレ・ロワイヤルで民衆向けのオペラ上演を企画したりした¹²回想が語られる。ソリアノはこの一見矛盾した感情を「われわれの物語作家の民衆への不信感—軽蔑にまで達する不信感—は数多くのテキストの中で確認され、それは彼の人生の多岐にわたる節目に現れている。たとえば、すでに引用したがピエール・ペロー（父親）が子供に施した教育についての一節で、それはまた「民衆の誤謬や迷信」に対する警告についてであったし、またさらにペローが、少々ばかにした口調で、気象や不運に関する民間信仰について例をいくつか挙げて一節が思い出される」¹³と分析するとともに、「彼（ペロー）は、当時としては、民衆の声を聞いた希有な人物の一人であり、口承文学を「立派な」文学の中において正当に位置づけた、または位置づけに貢献した人物であるが、まったく彼は「民衆の友」ではなかった。彼の民衆への共感は、恐怖と軽蔑と皮肉がない交ぜになった態度—要素である」¹⁴と述べ、その複雑な心境を明るみにしようとしている。

4. おわりに

ビュルレスク、オペラ、プレシオジテが古代人には未知のジャンルとして「時間の要素」による「知識の蓄積」という論拠に従い、近代優越の根拠とされた。現代においてその少数を除いて顧みられることのほとんどなくなった、十七世紀フランスにおけるこれらの作品群をペローが高く評価してしまったことは、批評家としての彼の眼力が問われることになっても仕方なからう。このことは、新旧論争において近代派に立った作家たちが、ラシーヌやラ＝フォンテーヌ、ボワローなどに比べて二流作家であったと断ぜられることがしばしばあることを思い起こさせる。しかし、モダンの意識に基づくペローの活動の多様性は評価されるべきであろう。コンパニオンは言う、「ボワローやラシーヌやラ＝フォンテーヌやボシュエらと対峙して、キノー、サン＝テヴルモン、ペロー、フォントネルといった人びとが、重きをなすだろうか。しかしこんなふうにいるのは、問題の立て方がまずい。なぜなら、力量が劣るとはいえ、オペラ、童話、小説といった新しいジャンルを、そして娯楽文学を擁護した近代派は、後世にとっては正しかったからである。たとえ、彼ら自身、時間を越えた完璧さをいぜん信じ、みずからはそれにとりて及ばないと考えて

いたにすぎないとしても、美というものは以後国民的・歴史的な言葉で語られることになるのだから、美の相対性を説く彼らの説は古代派の説を一掃した¹⁵。コンパニョンの言う、「オペラ、童話、小説といった新しいジャンル」には、言うまでもなく「ビュルレスク」を付け加えることが可能であろう。

(受理 平成 23 年 3 月 19 日)

¹ « Autre drogue cent fois pire que les deux premiers. Est-il possible, Monsieur l'Abbé, que vous vouliez faire honneur à notre siècle de la honte du parnasse, d'une poésie qui parle comme les halles, qui ne se plaît que dans la bassesse et dans l'ordure, et qui toute sale et couverte de haillon qu'elle est, a osé, pendant un fort longtemps, se produire effrontément dans le beau monde. » (Charles Perrault, *Parallèle des anciens et des modernes*, Coignard, III, pp.291-292.).

² 『トロイの壁』とペロー一家との関係、またビュルレスクとの関係については、ソペによる考察を参考にした (Les Frères Perrault et Beaurain, *Mur de Troyes ou l'origine du burlesque*, Livre I (Biblio 17. no.127.), texte établi, présenté par Yvette SAUPÉ, Tübingen, GNV, 2001, pp.11-48.).

³ « Au mépris du bon sens, le burlesque effronté / Trompa les yeux d'abord, plut par sa nouveauté : / On ne vit plus en vers que pointes triviales, / Le Parnasse parla le langage des halles ; / La licence à rimer alors n'eut plus de frein ; / Apollon travesti devint un Tabarin. / Cette contagion infecta les provinces, / Du clerc et du bourgeois passa jusques aux princes : / Le plus mauvais plaisant eut des approbateurs ; / Et, jusqu'à d'Assoucy, tout trouva des lecteurs. / Mais de ce style enfin la cour désabusée / Dédaigna de ces vers l'extravagance aisée, / Distingua le naïf du plat et du bouffon, / Et laissa la province admirer le Typhon. » (*Art Poétique*, I, vers 81-94. 守屋駿二訳 『詩法』、人文書院、2006、pp.46-47.).

⁴ « Le burlesque qui est une espèce de ridicule consiste dans la disconvenance de l'idée qu'on donne d'une chose d'avec son idée véritable, de même que le raisonnable consiste dans la convenance de ces deux idées. Or cette disconvenance se fait en deux manières, l'une en parlant basement des choses les plus relevées et l'autre en parlant magnifiquement des choses les plus basses. Ce sont ces deux disconvenances qui ont formé les deux disconvenances qui ont formé les deux Burlesques dont nous parlons. » (*Parallèle*, III, pp.196-197.).

⁵ « Cependant à le bien prendre le Burlesque du Lutrin, quelque beau qu'il soit, n'est qu'un Burlesque retourné. » (*Ibid.*, III, p.285.).

⁶ « (...) comme une Princesse est plus aimable avec un bavolet qu'une villageoise avec une couronne, de même les choses graves et sérieuses cachées sous des expressions communes et enjouées, donnent les choses triviales et populaires sous des expressions pompeuses et brillantes. » (*Ibid.*, III, p.297.).

⁷ « J'avoue que le Burlesque tel que vous le dépeignez est une très mauvaise poésie, mais il y a un Burlesque qui n'est point effronté, qui ne parle point le langage des halles, quoi qu'il se serve quelquefois d'expression un peu populaire, il y a un Burlesque qui a ses grâces et ses beautés, tel que celui de l'auteur du Virgile travesti. Il est vrai que dans le temps que cet ouvrage parut il se fit quantité de méchant Burlesque qui donna du dégoût pour tout ce genre de poésie; mais pendant que presque tout le Burlesque de ceux qui l'ont l'imité, sentait la boue et la harengère, celui-là a toujours senti le galant homme, et a toujours eu l'air de la Cour et du beau monde. » (*Ibid.*, III, p.292.).

⁸ « Je parle de plusieurs Poésies différentes de celles des

Anciens dans leur substance, dans la manière de traiter les sujets qu'ils mettent en œuvre. En voici trois qui me viennent d'abord en l'esprit. Les Opéras, les Poésies Galantes et le Burlesque. » (*Ibid.*, III, p.280.).

⁹ *Ibid.*, II, pp. 294-286.

¹⁰ « Les Lions et les Tigres qui se promènent présentement dans les déserts de l'Afrique, sont constamment aussi fiers et aussi cruels que ceux du temps d'Alexandre ou d'Auguste, nos roses ont le même incarnat que celles du siècle d'or, pourquoi les hommes seraient-ils exceptés de cette règle générale. Ainsi quand nous faisons la comparaison des Anciens et des Modernes, ce n'est point sur l'excellence de leurs talents purement naturels, qui ont été les mêmes et de la même force dans les excellents hommes de tous les temps, mais seulement sur la beauté de leurs ouvrages et sur la connaissance qu'ils ont eus des Arts et des Sciences où il se trouve, selon les différents siècles, beaucoup de différence et d'inégalité. Car comme les Sciences et les Arts ne sont autre chose qu'un amas de réflexions, de règles et de préceptes, l'Auteur du Poème soutient avec raison et je le soutiens fortement avec lui, que cet amas, qui s'augmente nécessairement de jour en jour, est plus grand plus on avance dans les temps (...). » (*Ibid.*, I, pp.89-90.).

¹¹ Charles PERRAULT, *Mémoires de ma vie*, Renouard, 1909 (rééd. Paris, Macula, 1993.), pp. 224-225.

¹² *Ibid.*, p. 228.

¹³ Marc SORIANO, *Le conte de Perrault, culture savante et traditions populaires*, Gallimard, 1978, p. 291.

¹⁴ *Ibid.*, p. 292.

¹⁵ アントワーヌ・コンパニョン、中地義和訳、『近代芸術の五つのパラドックス』、水声社、1999、p.41.